




ケイオスライド合同2

英 霊 汚 染

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止





BB♥チャンネルー♥
醜く下等な旧人類さん達みてますかー♥
お母様に次々とサーヴァントを取られていく情けない
先輩代理さんのためにちょーつと本気を出してあげようと
したBBちゃんはどうして、あっさりお母様に産みなおされ
ちゃいましたー♥

一緒にいたメルトとリップもお母様の泥でグチャグチャに
混ぜ合わせて、こうしてBBちゃん渾身のラフムへと
華麗に生まれ変わりました♥
たーっぷりケイオスタイドを詰め込んだリップの谷間に
人間を入れて溶かした後に、完全流体で作ったメルトの
おちんぽからラフムをビュルビュルー♥って排出して
すっごくキモくて無様なんですよー♥
もうしばらく街でこの子を遊ばせたらそちらに行くので
楽しみにしてくださいね♥旧人類さん♥







ドオオ

何…これ…!?
体の内側が熱っ…
霊基が…溶ける…

なかなか
頑張るじゃないか
しぶといね

でもその抵抗は
無駄に終わるよ

こ…こんな
キモい泥なんか
絶対負けないし…!!

強情だね…
いつまで
持つかな?



やっ…
やめ…
もう…
やめてくれっ
鈴鹿御前…ッ!!

だーめ♡
このままマスターの魔力
ぜーんぶ搾り取って
あげるし♡

あはっ♡
この征服感
マジサイコー♡

じゃーねー
マスター…♡



ラフムに変わり果てたラクシユミーに
魅了された俺は
夢中になって尻を突き
魔力が涸れ果てるまで射精した

ケケケ
ケケケ

トビキヨロ

肉汁uc



♡♡♡♡♡先輩♡
今日のオチンポの時間です♡

…ああ、もう先輩ではな〜…
肉便器でしたわ♡

世界を救えなかつた先輩は♡
この率寧の泥の中で♡
永遠に墮落と恍惚に溶かされて
混沌に還つていくんですよ♡

と言つても…
もうオチンポの事しか
考えられませんか♡

何厚も何厚も♡
オチンポの快楽を刻み込んで♡
チンポに絶対服従の肉便器奴隷に♡
改造してあげましたもんね♡

♡♡♡♡♡肉便器♡
お待ちかねの
オチンポですよ♡

いつまでも♡
永遠に含いなさい♡





くっ…
このような姿で
何をするのかは
知らないが…

私の心は…!
決して、屈し

おまじ



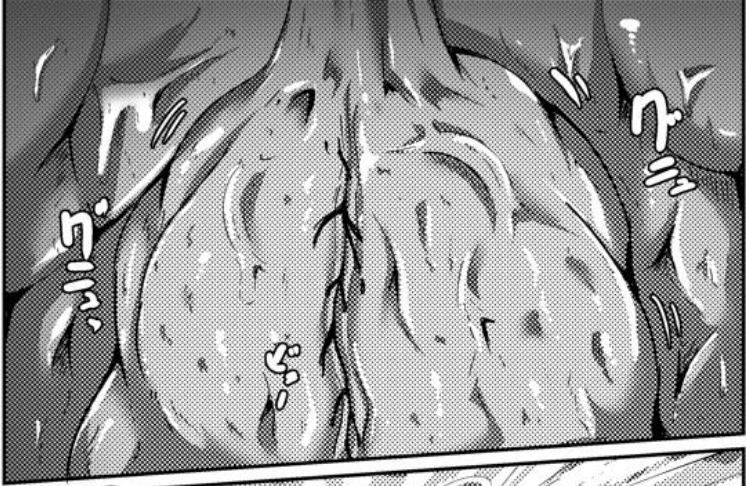
ああ…
だめだ
とケる
身モ
心も…

マ…
マスター…
助ケ…
テ…

ほっ♡ほっ♡
ほっ♡ほっ♡
ほっ♡ほっ♡

ややめ!
おん!
おん!

アッ
アッ
アッ
アッ
アッ
アッ
アッ
アッ
アッ
アッ



ハア...
クカカカ
カカカハ

ズブ...

待ってて ください
ワガ マスタ...
アハ アハハハ
ハハハハハハハハ

ズブ...





…なーんか私だけ逸れた…？というかレイシフトって
はぐれたりするんだな…私がまだ慣れてないから
違和感持ってるだけで普段からたまにこういう事が
あったりするんだらうか。まあ色々考えてても仕方ない

とりあえず皆と合流しないとそれにしてもこの森こんな
暗かったっけ…？なんか急に全体の雰囲気が変わっ…
？何、雨か？降りそうな天気とかじゃないと思うんだ





交尾楽しい♡タコ♡
ラムラムラムラム♡
ラムラムラムラム♡
ラムラムラムラム♡

ラムラムラムラム♡
ラムラムラムラム♡
ラムラムラムラム♡

トッ
トッ
トッ

トッ
トッ
トッ

トッ
トッ
トッ

トッ
トッ
トッ

トッ
トッ
トッ



うううううう...

うううううう...

うう...

気まぐれで
捕らえては
みただけ

これは...

うううううう...

うううううう...

なんだ
貴様は...

すごい掘り出し物
だったかもね
身震いがするほどの
凄まじい業を
感じるよ

業が深ければ
深いほど

産み直された
後が
楽しみだしね

何を...

ううう...

...

...

くそっ…
ペンテシレイア…
無事でいてくれ…!

!!!
先輩!
あの方は…!

マスター
何を
驚いている?

私は久々に
爽快なのだ
心も…体も…

ペンテシ…
レイア…?

自分が今迄
何をそんなに
憤り続けていたのか
不思議なほどに…

うっ…あ…?
(何だ?意識か…)

特に彼女のスキル
『黄金律』が
暴走して…いる
もの…と…
う…

そして気付いたのだ…
この体になったおかげで
私の新たな…いや
見て見ぬふりを
していたものに
秘められていた力に…

先輩…おそらくは
ペンテシレイアさんの
変異体…
元の彼女よりも明らかに
段違いの…魔力…

うう…マシユ…
…?!うぐっ!

今からその力…
お前のカラダで
試させて
もらうぞ…♡

ほう…
中々いいモノを
持っているのでは
ないか♡

なんだ…?
—舐めた…?
—それただけ…?

ほらあ♡
私の与える刺激で
興奮が抑えきれない
のであろう?
隠そうとしても
無駄だぞ♡

遠慮する
ことはない♡
ほら…早く
射精してしまえ…♡

そうだ
射精せ♡♡♡

うっ…!
これヤバっ…
マズい…っ

ああ…
私はなんと
愚かだったの
だろう♡

違う…

違う…!

もっと早くこの力を
使っていたら
最強…男共など
目ではなかった♡

そして…「あの時」
敗北することも
なかった♡

ダメだ
ンテシレイア…!

ほら
現にお前もこの力に
屈して
いるのでは
ないか♡

私の…この
「美しさ」に…っ♡

ダ…メだ…

ふう…もう終いか？
…まあ存分に
試すことは出来たしな
礼を言うぞ♡

ふふ…
今度あやつに
相まみえる時が
楽しみだ…♡

私を殺した
「あの男」に…♡

MASTER ROOM

もちろんだよ
今開けるよ

マスター
プラダマントテです…♡
入っても
いいですか…♡

シミュレーター
の故障で
ケイオスタイド
の汚染物質が
発生して

マスター君
聞こえるかい
大変だ！

ダヴィンチちゃん？

中でトレーニング中だった
サーヴァントの数名が
汚染されてしまったようだ

大分、日に焼けた
みたいだけど…♡

シミュレーター設定を
夏の砂浜にでもして
鍛錬してたのかい？

危険なので
部屋から出ずに
扉を強く閉めて…

しばらく誰も
入れないよつに
気を付けてッ…

え…
という事は…

マスター…♡

なんで服を
脱がッ…

ちよ…
プラダマントテ…



こんなビッキビッキにして
そんな事言つても…♡

説得力ないですよ…♡



ダメだよッ…
ブラダマunte
こんな事ッ…
君にはロジエロが…

これはただの
効率の良い
魔力供給方法で…♡

サーヴァントとして
必要な行為ですし…♡



チンポ
溶けるッ…

うああッ…







マスターの腰振り
しゅんっ!!♡

マスターに種付け
されちゃっ!!♡

助けてえ…
ロジエロ…♡

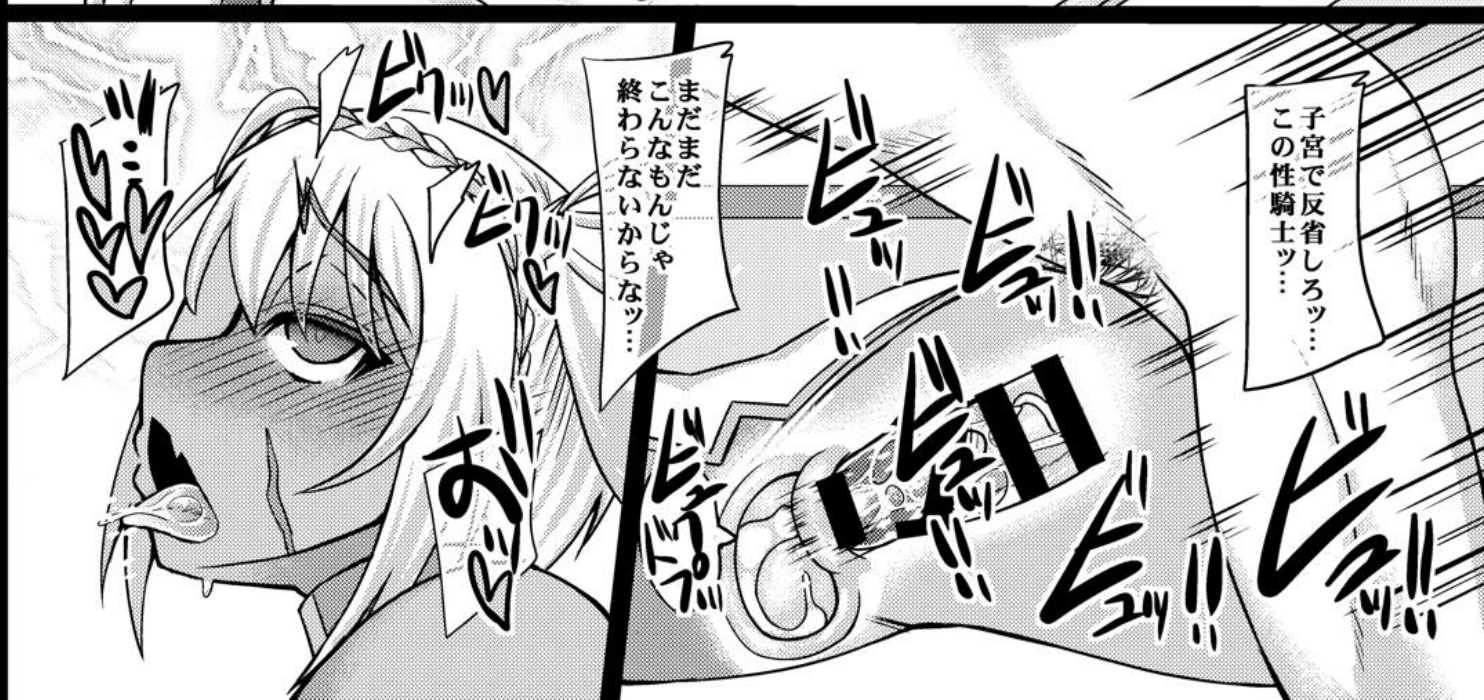


ブラダマンテが
いやらしく誘って
きたんだろツ…

マスターとして
こんなスケベな
サーヴァントはツ…

分らせてあげないと
いけないなツ…

マスターのおちんぼで
いっばいお仕置き
してくださいさあ!!♡



子宮で反省しろツ…
この性騎士ツ…

まだまだ
こんなもんじゃ
終わらないからなツ…





プ、プラダマンテ...
もう無理...

何を言ってる
んですかあ...♡

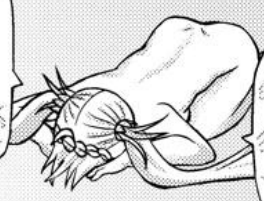
まだこんなにカッチカチ
じゃないですか...♡

頑張ってもうもった
出してくれないか...♡



翌日、正気に戻った
プラダマンテは
全裸でめちゃくちゃ
謝りに来た

申し訳ありません
申し訳ありません
申し訳ありません



申し訳ありません
申し訳ありません
申し訳ありません
申し訳ありません
申し訳ありません



大丈夫ツ...
大丈夫だからツ...

とりあえず
服着てツ...
ねっ?



司馬懿の依代である
ライネスの黒化――

『反転』の軸は
抑圧していた
「被虐性癖」
マソヒズム



トリムマウ・ラフムは
暴力的な自慰行為
専用の礼装と化した





この肉の檻に閉じ込められて何日が経っただろう…。
日の光も届かないそこで彼女たちは毎日産まされていた。
「もっ♡勘弁しっ♡吾がっ♡壊されでえ♡♡♡」
そこにおいて鬼の首魁達は嬌声をあげるただの肉袋だった。
「しゅてっ♡ひぎあ♡また生まつれえ♡♡」
嫌がるようにも喜びに満ちているようにも聞こえる
声が肉の檻に響き渡る。

子袋に隙間が出来る時間は与えられず
外に漏れればまた注ぎ込まれる。
「アッ♡グッ♡しゅてっ♡たすけ♡♡」
崩壊していく自我で助けを乞うも
もう自力で逃げようなどとは思えない。
泥のように侵食していく何かに悦びを委ね
彼女たちは愛する者の敵を産み続けるのだろう…。



「ニコニコは……」

「なんだ：起きたのか：まあ丁度いいか：
君も他の奴みたいに卵を産み付けようと思っただけで：
普通のサーヴァントじゃないよね？ なんだか色々
混じってるみたいだし：君、何なの？」

「なっ：!? 私はちゃんとしたマスターのサーヴァントです！
それよりマスターはっ!? 答えなさいキングゥ：!!」

「ど、どうい事：!? 私がそんな簡単に
どうにかなるも……」

「ああ：もちろんん：ナカにそれだけのモノが
入ってる君だからこそ簡単に壊れはしないだろうっ……」

はっ……

お……

ス
グ
ス
ク
ス
ク

「ではさようなら……
君はどんな怪物になつてくれるんだろうね……」

「さあ：知らないなあ：まあ知っていても
君にはもう関係のない事さ……
母さんの所で生まれ変わつてももうからね……」



「ああああああアアア!!イヤつ!!もう沈めないで!!
私の霊基ッ!!変になつちや!!」

「あぎッ!!そんなトロ入ってこない!!でえ!!
んひッ!!おっぱいも!!やあああッ!!」

「そこ耳の!!んぎッ!!あ♡あ♡あつ!!♡
いやつ!!頭のナカでぐちゅぐちゅつてえ!!♡」

アッ
アッ
アッ
♡

おっ
おっ
おっ

「あえっ♡んっ♡ぎもちSSSS♡
さつきまれ泥が痛がつだのにっ♡」

「泥が当たつてるとこお!!
ぎもちいいよお!!♡」

「あ!!♡あつ!!♡らめえ!!♡ぎもちSSSS♡
こんにゃのっ!!おかひくなつちやうう!!♡」

おっ
おっ

ぐちゅん

ぐちゅん

ぐちゅん

ぐちゅん

ぐちゅん

ぬちゅん

ぬちゅん

「ああ、素晴らしいね。まさかここまで異質なモノになるとは
思わなかったよ。やはり君の中にいたモノの影響かな？」

「んぐっ♡♡ゲヒヒ♡♡♡
でビゅっ♡♡イギギ♡♡♡」

「ギも♡♡チ♡♡ツ♡♡オツ♡♡
き♡♡い♡♡い♡♡い♡♡」

「んぐっ♡♡」

「んぐっ♡♡」

「んぐっ♡♡」

「んぐっ♡♡」

「んぐっ♡♡」

「ふっ…まあ今の君にはどうでもSS事だね…
では精々沢山産んでくれ！」

「んぐっ♡♡」
「んぐっ♡♡」
「んぐっ♡♡」



眼前に広がる

饗宴
血と肉と泥の

マリー様が既に堕ちてた

描いた人 絞妻丈二



獣の姿で
塗り潰されていく



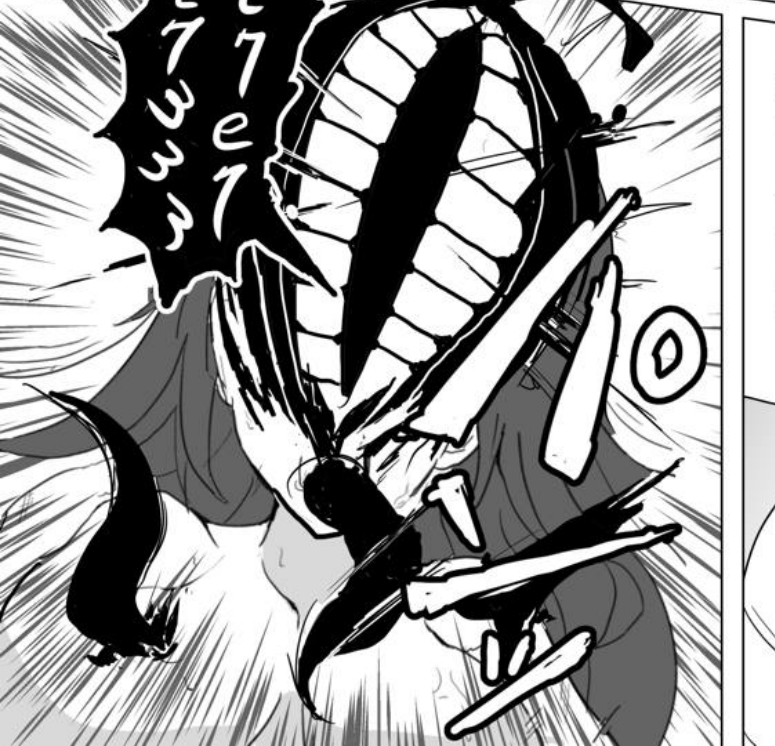
綺羅星のように輝く
彼女の心象が



彼女を縛りつけていた
「マリー・アントワネット」
という偶像(シンボル)

そこからこんな形で
解放されたのは

もはや皮肉を通り
越した侮辱だろう





空に輝きを

地には恵みを

民に幸せを



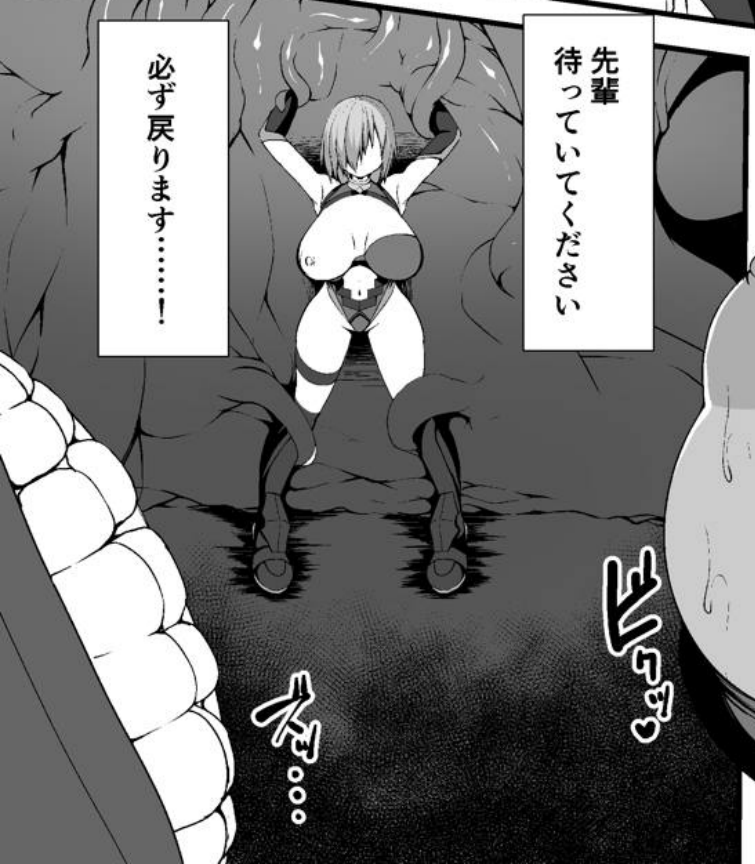




先輩とはぐれて
ラフムに捕まり……

くっ……

ここは一体……



必ず戻ります……!

先輩
待っていてください



くっ……♡

グッ

グッ……

あなたが生きる永遠に

「先輩」

自分に宛がわれた寝台の上で、藤丸立香は目を覚ます。

「先輩、起きてください」

微睡みの中から藤丸を引き上げたのは、聞き慣れた声。泥のように重い
臉を、強引に持ち上げる。

そこにいたのは、予想通りの人物だった。

女神のような派手さこそないものの、整った顔立ちの少女だ。薄紫の
髪はショートカットながら、前髪は片目を隠すほど。身につけているのは、
黒に紫のラインが入ったインナーのみ。肩と胸元は大きく開かれて、スレ
ンダーでありながら豊満な胸元の膨らみはつきりとわかる。

マシユ・キリエライト。藤丸立香のサーヴァントだった少女だった。

その肌は、黒い。艶のある粘土のような、泥の黒。形の良い唇を、桃色
の舌がれろりとエロティックな仕草で舐める。

「紅い——鮮血の如く紅い瞳が、藤丸を見つめていた。」

「先程、私の存在を起点として、我々を観測するカルデアの侵食も完了し
ました。旧人類の逆転の目は完全に潰えました」

さも愉快と言いたそうに、ウキウキとした口調でマシユが報告する。絶
望的なその言葉にも、もはや藤丸の心は動かなかった。

「今はダヴィンチちゃんが召喚システムの調整をしているところです。母
さんの黒泥とリンクさせることで、こちらでも玩具の召喚ができるよう
になるそうです。先輩にはたくさん喚んでもらいますよ。でも、それより
もまずは——」

長手袋に覆われたマシユの手指が、藤丸の股間をまさぐる。朝勃ちの硬
直を楽しむように、指先がその形状をなぞっていく。むくむくと、起きが

けの生理現象とは別に、海綿体へと血が流れ込み、屹立が角度を増す。

「今日ほどの服装でしましようか」

マシユの唇が、淫猥に弧を描く。

「いつもの騎士装が良いですか？」

一步——マシユがゆっくりと歩を進めると、とぶんと粘質の蜜音を伴
って、マシユの声が二つに増える。

もう一人のマシユが、インナーの上に黒銀の鎧を纏って微笑んでいた。

「カルデアでの私服が良いですか？」

一步。マシユの声が三つに増える。新たに生まれたマシユが、黒のワン
ピースにパーカーを羽織って微笑んでいた。

「水着の方が好みですか？」

一步。マシユの声が四つに増える。白を基調に赤紫のラインの入ったワ
ンピースタイプの水着を着たマシユが微笑んでいた。

一步、一步、一步。

様々な衣装に身を包んだ何人ものマシユが藤丸を囲んでいく。

個体増殖——ティアマト神の眷属となった彼女に与えられた権能。

元より、異性の視線を惹きつける肉付きだったマシユだが今の彼女はそ
れを恥じらないも、隠そうともしない。プロポーシオンそのものは以前と変
わらないはずなのに、全身から醸し出される淫猥なフェロモンは、何倍に
も濃厚だった。

「おっ♥ おほっ♥ うまつ♥ うまりえりゅっ♥ またうまりえりゅ
っ♥」

下品な啼き声が聞こえる。マシユは、かつてであれば到底浮かべること
のなかった嘲弄をその顔に浮かべて振り返る。藤丸の視線もまた、つられ
てそれを追う。

啼き声の主は、イシユタルだった。砂糖に群がる蟻のように、彼女に群
がっているのは、ティアマト神の侵食を生き延びた、他ならぬイシユタル

の信者たち。ある者はイシユタルの膣を犯していた。ある者は尻孔を犯していた。ある者は口腔を犯していた。ある者は自らの男根を、女神にしごかせて恍惚を浮かべていた。

「ほら、退いてください。新しい家畜の誕生です」

マシユたちの言葉に、イシユタルの信者たちが陵辱の手をとめて肉棒を引き抜いていく。口から、膣から、肛門から、ドロリと白濁した欲望が零れ落ちる。

後に残されたのは、全身白濁まみれの豊穡の女神のみ。スレンダーな肢体の中で、腹部だけが異様に膨らんでいた。マシユと比べればささやかな乳房の膨らみは、しかし内側からパンパンに張り詰めている。

その美貌は快感に蕩け、艶やかな黒髪を振り乱して力んでいた。紅玉のような瞳には、ひとかけらの正気も残っていない。

「あかちゃんおまんことおつてっ♥ あ、ぐあ♥ でりゅっ♥ あかちゃんでりゅううっ♥」

彼女はマシユとは違い、黒泥に侵されてはいない。しかし、藤丸が味わされた何倍もの陵辱と快感を受けて、壊されてしまっていた。

注ぎ込まれた精液は、魔術によって、まるで早送りのような速度で受精し、成長し、ほんの数時間で出産を迎える。

藤丸の知る限りでも、彼女は既に十を超える仔を孕み、産んでいた。その中には、他ならぬ藤丸が孕ませた仔も含まれている。

「さすがは豊穡の女神ですね。イシユタルさんはもう二十五匹、目を出産するようです」

「おっ♥ おほっ♥ おぐうっ♥ おまんこ、ひろがっ♥ でりゅっ♥
でちやうっ♥ あかちゃんでりゅうううっ♥」

美の女神が、蕩けた美貌で必死に力む。たつぷりと注がれた男たちの精液が押し出され、射精のような勢いで噴き出す。直後、いやらしく口を開いた淫裂から、赤子がひり出される。よほどに気持ち良かったのか、ぶし

ゆう、ぶしゆうとクジラのように潮を吹き、乳房からも乳液を撒き散らして産んだばかりの赤子を濡らしていた。

「あ……♥ いひい……♥ うまれっ♥」

生まれ落ちた赤子を、パーカーを着たマシユが抱きかかえると、どこからともなく現れたラフムに手渡される。彼らは成長促進の魔術で一週間と経たぬ間に成人と同じ体躯にまで成長させられて、さらなる次代を生産するための家畜か、新人類の玩具として用いられる。

「ふふ、仮にも母さんの娘ともあるう女神が、なんて下品な声を上げるんです。先輩もそう思いませんか？」

マシユの問いかけに、藤丸は答えない。

「ですが、勤勉なのは良いことです。ほとんど殺してしまっただけで残っていませんし、たくさん旧人類を生んでもらわないといけませんからね。もちろん、先輩も——」

くすくす、とマシユは笑う。

「先輩も、またイシユタルさんを孕ませたいんですか？」

耳元で囁かれ、ドクン、と肉棒が脈を打つ。興奮に反応したのか、精巣がドクドクと力強く精子を生産するのがわかる。

「それとも——」

とぶんと、足下の黒泥が波打ち、ひとりでにせり上がったかと思うと、マシユのカタチを象る。今度のマシユはイシユタルの着ているものと同じ服装。

「——イシユタルさんの衣装の私を孕ませたいですか？」

戦と豊穡、そして愛と美を司るメソポタミアの女神の装束は、黒艶のある肌がほとんど隠されていない扇情的な衣装。現代の魔術師の少女の肉体を依代とした今のイシユタルのスレンダーな肢体よりも、グラマラスなマシユが着ると、遙かに淫靡な様相となった。

「でもやっぱ、以前のハロウインのときに着た礼装ですか？」

とぶん。新たに黒泥から生み出されたマシユは、獣に似た仮装コスプレをしていた。頭の上には一對の犬耳。腰の後ろにはふさふさの尻尾。紫色の毛房が辛うじて局部を隠してはいるものの、イシユタルの服コスチューム装よう以上に露出が多い。毛房と毛房を繋ぐ細い紐がマシユの肢体に食い込み、その肉感を強調していた。

「ふふっ。やっぱりこれが一番興奮するみたいですね。本当に先輩はエッチなんですから」

手指に伝わる感度で、その膨張を感じ取ったのだろう。マシユの視線が藤丸の股間へと向けられる。露出させられた肉棒は天を向いてピンと勃起し、鈴口からは躰の成っていない駄犬が口元から零す唾液のように、ただらとカウパーが染み出している。

マシユが見せつけるように身体を振ると、豊かな乳房がたゆん、たゆんと上下に揺れる。

蠱惑的な笑みを浮かべ、狼ウルフの仮装コスプレのマシユが藤丸に唇を重ねる。藤丸は抗うこともできずにそれを受け入れる。恋人同士がするような、甘く、優しい口づけ——今のマシユがそんなもので満足するはずもなかった。重ねた唇がぶちゅうと押しつけられ、開いた隙間にマシユの舌が入り込んでくる。体温そのものは死体のように冷たいのに、長い舌はやけどしてしまいうようなほどに熱い。ドロリと粘性の高い唾液が、舌を樋とにして流し込まれる。口内に拡がるのは、甘ったるい芳香と味。味蕾が甘露に支配されて、藤丸は無意識のうちにそれを嚙下していく。

「は、ああ、くっ……」

重ねた唇の隙間から、藤丸の苦悶の声が溢れる。唾液に含まれる強烈な催淫作用に抗おうとしているのだ。そんな抵抗を嘲笑い愉しむように、舌が絡め捕られる。蜘蛛の糸に捕らえられた哀れな蝶のように、もはや逃げ出すはなかつた。

流し込まれる蕩けるほどに甘い唾液を、こくっ、こくっ、と喉を鳴らし

て呑み下すたび、腹の奥で強烈な熱が疼き、理性を灼き焦がして一匹の獣へと作り替えようとしてくる。

慈愛、博愛、友愛、親愛、そのどれも違う。愛という文字すら相応しくない。有性生殖生物の本能としての性欲だけが、先輩と後輩、マスターとサーヴァント、そして共に世界を歩んできた大切な仲間——そんな関係性を塗り潰して、目の前の大切な存在が、どうしようもないほどに魅力的な性の対象としか見えなくなる。

追い打ちをかけるように、マシユは両腕を藤丸の首の後ろに回すと、ギョツと抱き寄せる。柔らかな牝の感触が胸板を中心に伝わってきて、オスとしての本能を強引に引き出そうとする。

「先輩もそろそろ、その気になってくれましたか？」

「私たちのこと、滅茶苦茶になるまで犯したいですよね？」

体重をかけられて倒れそうになった藤丸を、背後から私服を着たマシユと水着の二人のマシユが支える。柔らかな肉の感触が背中にも伝わってくる。

問いへの答えを求めて、重ねた唇が離れる。名残惜しげに二人の口から銀色の糸が長く伸びた。

「ま、しゅ……やめ……る、ん……」

頭の中はほとんど、目の前の彼女たちを犯す欲求で満たされていながら、藤丸は意思を振り絞って語りかける。

意に反するはずの回答を受けて、しかしマシユたちは不快感を見せることはなかった。それどころか、鮮血のように輝く紅の瞳を爛々と輝かせて、くすくすと微笑む。

——それでこそ、先輩です。

——壊れないように我慢している甲斐があります。

「ま、ひゅ……」「ん、ちゅっ……♥」

さらなる説得を続けようとする唇を、マシユは再び唇で塞ぐ。一度目

上に簡単に、舌は唇の防壁を押し退けて口内へと辿りつく。頬の裏側を舐めて、歯茎を、口蓋を愛撫していく。口の中を舐められているだけだというのに、性器を刺激される以上の、異常な快感が流れこみ、パチパチと頭の奥でスパークする。

「先輩、気持ちよさそう……♥」

「じゃあ、私たちも……♥」

背後で藤丸を支えるマシユたちが、細い指先で円を描くように藤丸の乳輪をなぞりはじめる。決して強い刺激ではないものの、緩急のついた愛撫は残り僅かな理性のタガを削るには十分すぎる快感だった。

「そろそろ、おちんちんも触ってほしいですよね？」

「ぐっちよぐっちよのドスケベおまんこに、おちんぼ、ぶちこみたいんですよね？」

ぐちゅ、ぐちゅと。背後のマシユが自らの割れ目をほじくって、卑猥な粘泥音を響かせて聞かせる。淫らな音色が鼓膜を撫でて、それだけでも達してしまいそうなほどに、藤丸は張り詰めていた。

「じゃあ——最初は、おクチでしてあげます♥」

騎士装のマシユが藤丸の前で屈み、勃起した肉棒の臭いを確かめるようにクンクンと鼻を鳴らす。その呼気が裏筋を撫でるように流れて、ピクンッ、と肉棒が跳ねる。

「ふふっ♥ 私も先輩の好みに合わせてあげたんです。先輩も、私好みになったださいね♥」

マシユは大きく口を開けると、藤丸の勃起ペニスを一口に咥え込んだ。唾液が肉棒に纏わり付き、染みこんでいく。それ自体が凄まじい快感であり、ジリジリと脳を焼く。いつ射精してもおかしくないはずなのに、射精のタイミングすらも完全に掌握されて、ただされるがままに地獄のような快感に脳神経を灼き焦がされ続ける。

「あむっ……んっ、むうっ、ちゅっ♥」

口内に溜まった唾液が、蛇のように自在に動く舌を使って肉棒へと塗りたくられてゆく。触れたその先から、唾液は細胞のひとつひとつに根を張って、作り替えていくのがわかる。

「ん……むっ♥ おいひっ♥ あむっ、ふうっ♥」

じゅるじゅると音を立てるマシユの口内で藤丸の男性器が膨張していく。自然な勃起とは明らかに違う。頬張ったマシユの頬が内側からの体積に押し退けられる。マシユは舌を使って唾液を絡め、念入りに奉仕する。

「く、うっ……はあっ、かっ……」

なんとか声を嘔み殺そうとしても、敏感な性感帯を舌先で、舌腹で、舌根で、唇で、巧みに刺激する口淫術に抗えず、蕩けた声が溢れてしまう。その声に興奮を高めたマシユたちが、くすくす、くすくすと囁いながら柔らかな身体を押しつけてくる。

しばらくの間、口の中でふやかされてから、マシユの口腔が藤丸を解放する。唾液が、長い銀色の糸を引いて伸び、切れる。

再び露わになった男性器は、先ほどまでの平凡なそれとは大きく変貌していた。概^{シルエット}形だけを見ればさほどの変化はないものの、皮膚の色はマシユたちのような黒泥色に染まり、長さは二倍超、太さは三倍以上はあるだろう。悪魔^{デーモン}の尾端のように大きく傘の開いたカリ首、竿全体には海魔のそれに似た微細な触手が無数に蠢き、表面に複雑な凹凸を作っている。マシユの唾液を纏ってヌラヌラと光沢を放つ異形は、藤丸本人の意思とは別個に、それ自体が邪悪な意思を持っているようにも見える。どう見ても、尋常なる生物進化の中で生まれるはずのない異形の器官。それがごく平凡な人類の身体についているというギャップこそが、その異形感を高めている。

「あはっ♥先輩のおちんぼ、ステキです♥」

「触手がうねうね蠢いて、すっごく気持ちよさそう……♥」

「物欲しそうな顔をして……そんなに私のことを孕ませたいんですか？」
 耳朶を撫でる生温かい吐息が、理性を剥ぎ取る。少しでも気を抜けば、



意識は異形の肉塔の求めるまま、獸欲に支配されてしまうことだろう。

「先輩の大好きな、おっぱいでしてあげますね♥」

鎧が除装され、薄いインナー一枚の姿となった。インナーの布地越しに乳輪ごと乳首がぶっくりとが浮かび上がって、淫猥な凹凸を形作っている。そのまま豊富な谷間の布地に指をかけ、下に引っ張る。その膨らみによって固定されていたインナーが剥がされ、柔らかさを主張するように、たゆんつ、と豊乳がまるびでる。

重力に引かれながらも美しい形を保つ美巨乳をマシユは下から支えるように持ち上げると、谷間を広げて異形の肉槍を包み込んだ。

「ん、んんっ！」

柔らかい肉の感触に藤丸が快感の叫びを上げようとするが、重なった唇がそれを呑み込み、舌を絡めて下半身だけに集中させない。

マシユ自身の手と、そして乳肉自体の自重によって肉棒が挟み込まれる。柔らかな乳肉はぐにゅう、とスライムのように淫猥に変形し、包み込んだ肉竿に吸着する。異形と化した巨根は完全には隠れきらず、毒々しい茸の先端部分が露出してしまっていた。

「あふっ……んっ♥先輩のおちんぼ、あつついい……♥」

先ほどまで肉棒を咥え込み、異形へと変質させた口を開け、つう、と糸引く唾液を谷間に落とす。だら、だらと、水飴のような唾液がとめどなく流れ、毒茸の傘先を介して深い谷間に染み込んでゆく。数秒としないうちにひたひたになるほど唾液の泉を作ってから、マシユは胸を動かす始める。

両手で抱えるように乳房を支えて、上半身ごと身体を揺らす。じゅぶつ、じゅぶつ、とまるで口で咥え込んでいないやらしい音が溢れ、すさまじい快感が藤丸を襲う。

「気持ちいいですか？ 気持ちいいですよね？ ふふっ」

「ほら、頑張ってください？ 先輩が諦めたら、もう旧人類に勝ち目はな

んですから」

「……頑張って、耐えて……肉欲に抗ってくださいね♥」

矢継ぎ早にマシユの声が、そして口腔を、耳朵を、鼓膜を、乳首を、背中を、肉棒を、心を、揺さぶり愛撫してくる。

全身を使って乳房を包み、愛撫すると、意識せずに肉棒に生えた触手が蠢き乳肉に吸いつく。

「んっ♥ おっぱいの中で触手がうごめいて、私のおっぱい犯してます♥」

激しい上下運動で、谷間に溜まった唾液が飛び散る。摩擦によって生じる乳悦に、とうに限界を超えた射精欲求が刺激される。ぎゅるぎゅると精巣で精子が作られて、内側から玉袋が張り裂けそうになるほど膨らむ。しかしまるで根元を強く締めつけられているかのように、マグマはグツグツと煮え滾ったまま抑え込まれる。

「先輩のおちんぼ、ビクビクいつてる……射精したいんですか？ 私のおっぱいおまんこに、ビュクビュクってオス臭いおちんぼ汁ぶちまけたいんですよね？」

熱い吐息が、龟头に向けて吐きかけられる。黒泥色の肌に鮮やかな桃色の舌が、異形の肉槍の先端をチロチロと舐めてくる。腰の奥から頭のとっぺんまで、強烈で暴力的な快感が暴れ回る。

じゅるじゅる。

れろ、れろおっ。

射精への欲求以外のあらゆる思考が、頭の中から猛烈な勢いでカウパーに押しだされて、桃色の舌に舐め取られてゆく。

「ま、しゅ……ましゅ、う……」

「でも、ダメです」

ヘコヘコと前後に腰を振り出した藤丸を嘲笑って、マシユは乳肉から解放する。熱い乳悦から解放された肉棒が、冷たい外気に触れてピクンッ

と身震いする。

「射精すなら——おまんこに、です♥」

問髪を入れず狼の仮装のマシユが腰を浮かせ、騎乗位の姿勢で乳悦から解き放たれたばかりの肉竿の先端に己の割れ目を押し当てる。

ぐっちゅうっ。

触れた先から、粘り気の強い蜜音が響く。

「あんっ……♥ はあ♥ 先輩の、あっついい♥」

マシユの入り口、淫らに開いた花卉のような淫唇が、毒々しい茸の先端に甘く、優しい接吻を交わす。柔らかい腸の感触と、火傷しそうなほどの淫熱が敏感な龟头から伝わる。

くちゅ、くちゅ。

ぐちゅ、ぐちゅっ。

それも一度ではなく、二度、三度、四度。腰を上下左右にゆらゆらと揺らしながら触れ合わせる。ドロリ、ドロオリと、そのたびにマシユの蜜汁が獣欲の塊となった肉棒に塗りとくられてゆく。

「う、ぐ、あああああああああ！」

獣のような雄叫びを上げて、藤丸はマシユの腰を掴む。手指がぐにゆりと音を立てそうな勢いで、柔らかな脂肪層へと食い込み、変形させる。意地悪く腰を浮かせる後輩を引き寄せて、異形化した肉根で貫いた。

ズブズブズブズブッ！

「んはああっ♥ 先輩のおちんぽきましたあっ♥」

数え切れないほどの人と、そして人でないものとも交わってきたマシユの入り口は、異形と化した男性器を簡単に啜え込んだ。

巨大な体積が肉襞を押し退け、蜜壺を満たす。内側にたっぷり溜め込まれていた淫らな花蜜が押し込まれ、結合部から飛沫をあげる。一息のうちには異形の巨根はマシユの内側へと呑み込まれる。決して大柄ではなく、むしろ華奢ですらあるマシユの内側に挿入するのは、奇術じみた光景だった。

最奥にまで達した先端を、下ってきた子宮の入り口が受け止める。

「んっ……♥ 先輩の、先っぽ、私の、奥に……♥ んっ♥ ふふっ。今日もガマンできませんでしたね。旧人類を裏切って味わう後輩のおまんこは気持ちいいですか？」

使い込まれたその熟れ具合とは裏腹に締め付けは緩くはなく、かといって苦しいほどに窮屈でもない。膣道に無数に並ぶ肉襞が絶妙な力加減で肉棒を抱き締めて、抽送を開始するまでもなく、挿入しているだけで極上の——拷問のような快感を送り続ける。

「気持ちいいですか？」

「ぐ、う、あ、あアあっ——！」

答える余裕もない藤丸に再度問いかけながら、マシユの膣道がキュウと収縮し、藤丸の肉棒を強く抱き締める。膣道の内壁に生えた肉襞の一枚一枚が、それぞれ独立した生物であるかのように複雑な動きと力加減で藤丸の性器を愛撫する。射精を封じられた現状、もはやその快感は脳神経を灼き焦がす激痛となつて藤丸を苛む。

「ねえ、先輩？」

三度目の問いかけに、もう堪えられないとばかりに藤丸は首を振る。ガクンガクンと、壊れた玩具のような首肯。

「きも、ちい、きもち、いいっ……」

快樂という名の激痛に灼かれて、狂ったように頷き続ける。

「気に入っていたただけなようでもなによりです♥」

囁きながら、マシユはゆっくりと抽送を開始する。ただ抱きとめられているだけで狂おしいほどだった快感が一瞬で何十倍にも膨れ上がり、しかし射精は決して許されない。射精欲求が藤丸の理性を砕き、崩して、融かして、藤丸を一匹の獣へと変えていく。腰が浮き、前後して、マシユの深い部分突き込み始める。抽送はみるみる加速してゆく。

「そんなに私のことを孕ませたいのであれば、令呪で命じてください」

インナー姿のマシユが藤丸の右手を取り、握ったかと思うと、その甲に唇を触れさせ、舌を伸ばして舐め上げる。三画の令呪の上を、ドロリとした唾液がコーティングして、藤丸の身体がビクンツ、と跳ねる。

「令呪を、も、て……めい、ずる……」

熱を帯びた喘ぎ混じりに、言われるがまま、藤丸は言葉を続ける。

「射精、させて、マシユ……マシユウッ」

情けない敗北宣言を口にした藤丸に、

「はい——先輩♥」

マシユはこの上なく淫靡やみしくに微笑みかけた。

瞬間、藤丸の手の甲が輝きを帯び、令呪の魔力がマシユに流れ込む。下腹部に浮かんだ獣の紋章が妖しい光を放つ。

それを合図とするように、それまで抑え込まれていた快感が、藤丸の中で一気に爆発する。

反射的に腰が暴れ馬のように跳ね上がり、亀頭がマシユの子宮口にグイグイと強く押しつけられる。

「おっ♥ しゅごおっ♥ 先輩のおちんぽっ、わたしの、子宮に、くいこん、れえっ♥」

勢いよく突き上げられた肉竿の先端は、子宮口を押し抜けて食い込む。通常の人間では耐えられない行為でも、今のマシユは痛みすらなく純粹な快感として受容する。マシユは大きく背を反らし、口腔からは舌と唾液を踊らせる。ビクビクビクンツ、とマシユの身体が痙攣し、結合部から淫涎がブシユウと鯨のように潮を吹く。絶頂によって膈道はキツイほどに収縮し、肉槍の表面で蠢く微細触手と抱き合うように絡みつく。これから注ぎ込まれる精を、外に逃さないための、熱烈な抱擁。

「旧人類の敵をいっっぱい、作りましようね♥」

二人のマシユが、両の耳たぶをしゃぶりながら、藤丸に囁きかける。
ドクドクドクドクドクンツッ！

力強い迸りが、異形の肉根を駆け上がっていく。マグマのような灼熱感が内側をせり上がり、先端——マシユの子宮口に狙いを定めた亀頭冠から精を放つ。

ブツ、ビュルツ、ビュルルツ、ドユリユリユリユリユウツッ！

半ば固めいた粘性を帯びた魔精が、マシユの子宮の内側へと直接注ぎ込まれる。

「ああっ♥ 先輩のザーメン来ましたあっ♥ 先輩の精子が私の卵子をレイプしてますうっ♥ 先輩の精子のえっちいい♥ ぷっぷっぷっうって

♥ わかりますか？ ああすごいひいいっ♥」

完全にトリップしたマシユを見つめながら、他のマシユたちもうつとりと頬を朱に染める。快感を共有しているかのように、全員がビクビクツと身体を震わせる。

どぶどぶどぶどぶううっ♥

改造された異形の肉槍は、射精の勢いも、量も、尋常な人のそれを大きく上回っていた。水道の蛇口を全開にしたような凄まじい勢いで注ぎ込まれて、マシユのお腹は見る見るうちに風船のように膨らんでいく。下腹の獣紋が煌々と輝いて、幾千回目とも知れぬ受胎を祝福しているようだった。

「はっ、ふう……ひい……あ……うう♥ はあ……ああ……んっ♥ はあっ♥」

藤丸の上で陶然とした媚声を漏らし、腰を押しつけるマシユを横目に耳をねぶっていた私服姿のマシユが、藤丸に唇を重ねる。自らの胤たまごを注ぎ込みながら交わす濃密な接吻は、それまで以上の快感を生む。パチン、パチンと目の奥でスパークが弾けて、目の前が白と黒を往復する。

どれほどの時間が経ったのか、永遠に続くかと思えた快感は終わった頃には、マシユの腹は臨月の妊婦ですらありえないほどに大きく膨らんでいた。獣の紋様が煌々と輝くその上で、内側から押し込まれた出ペソは豊乳の上で勃起する乳頭のようにも見えて、どこか淫靡ですらあった。



「いっぱい、射精しましたね……♥」

マシユが腰を上げていく。

じゅぶつ、じゅつ、じゅじゅるうつ。

輸精管に残った精子の一滴さえも残さず搾り取るうとするように、淫猥な吸着音を響かせながら、肉棒が引き抜かれていく。異形と化していた肉棒は、射精を終えてその役目を果たしたのか、すっかり萎れて、色も大きさも形状も、すっかり平凡なものに戻っていた。その先端までもが完全に引き抜かれて、藤丸は快感からようやく解放された。

身重のマシユはゆっくりと立ち上がると、藤丸と対面になるように腰を下ろす。慈愛と淫欲に満ちた笑顔を浮かべて、子を宿した腹を撫でる。

「ふふっ♥ 見てください、ここに先輩の赤ちゃんがいるんですよ♥ 生まれてくるのは旧人類の敵……先輩がおまんこにびゆるびゆる射精しちゃったせいで……♥」

心を抉るマシユの言葉も、強烈すぎる快感に脳を焼かれた今の藤丸の耳には口々に届いてもいなかった。これまで何回、何十回と繰り返され、これからも何百、何千、何万回と繰り返されるであろうやり取り。半日もすれば意識は明晰さを取り戻し、自分の犯した過ちを悔いるようになるだろう。だが今は、今だけは罪悪感もなにもかも忘れて、快楽の余韻に溺れることを許されていた。

「あ……あああ♥」

ピクンッ、と。身重となったマシユの身体が痙攣する。魔力によって成長を促進された胎児が、早くもこの世に生まれ落ちようとしているのだ。それ自体が快感となっているのか、マシユは蕩けるような表情で腹を撫でながら、空いた片手で秘唇をぐちゅぐちゅとまさぐつていた。

「はあっ♥ 生まれるっ、うまれますっ♥ 産道とおつてっ♥ 先輩との赤ちゃん生まれるううっ♥」

感極まったマシユが力んだ瞬間、プシヤアアッ、と勢いよく潮を吹く。

子宮内に注ぎ込まれた大量の精液が逆流し、まるでマシユが射精しているようにすら見える。ただでさえ精臭の満ち満ちた周囲に、とびきり濃厚な精臭を広げながら、赤子が産み落とされる。

「はあ……はあ……はあ……」

「みて、ください……先輩……♥ 先輩と、私のお♥ 赤ちゃんです……♥」

インナー姿のマシユが取り上げた赤子は、異形だった。肌の色はマシユや牛若丸たち、母なる海に呑み込まれたサーヴァントと同じ黒泥色。胴体から頭と四肢が生えている、という点だけを見れば人と同じであるものの、旧人類と新人類とが混ざり合ったような、異形の姿をしていた。首から伸びる頭はラフムのそれにそっくりで、生まれたてだというのに縦横を入れ替えたような歯が生え並び、快楽に負けて母に胤を注いだ父親を嘲笑っているようにも見えた。

「これで何人目ででしょうか。先輩も、立派なお父さんですね♥」

「安心してください。先輩のことを壊したりなんてしません。先輩は私のマスターとして、これから紡ぐ新しい人理を一緒に見るんですよ……」

うっとりとした様子でそう告げて、マシユが口づけを求め、もう藤丸も抵抗はしなかった。求めに応じて、自分から唇を重ねる。

マシユが求めるままに舌を絡め、自らもマシユを求めてそれにマシユが応える。マシユの背中に手を回し、今度は自分からぎゅつと抱き寄せる。彼女と出会ったあの日のことが、フラッシュバックする。伸ばされた手を、握り返したあの手の柔らかさと、温もり。何もかもが変わってしまったはずなのに、両腕に、全身に伝わってくる感触は、あの時となにも変わらない。柔らかい温もりを楽しむように、抱擁を強くする。何人ものマシユが、獲物に群がる蟻の群のように、藤丸を包んでいく。

ケタケタ、ケタケタと。

赤子の産声が、かつてウルクと呼ばれた都市に響き続けた。

カルデアはつかの間の安らぎを得ていた。

ひとまず人理焼却の危機は去り、外部との連絡も取れ物資の補給も行えている。それ故に、施設内の警戒は以前よりも数段緩いものに変えられていた。

そんなある日、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァに与えられている自室で。

「ヴィイ、やめなさい！」

制止の声と共に放たれる冷気が部屋中を凍りつかせる。しかし、アナスタシアの目の前でひとりでに浮遊する人形だけは何の影響も受けず、ただゆらゆらと浮き続けていた。

人形——ヴィイは継ぎ目から黒い液体を溢れ出させながら、じっと何もない顔をアナスタシアに向けている。

本来ならばヴィイ本体に繋がった端末というだけの人形だったはずのそれは、明らかに意思を持ってるように駆動し、今もぼたぼたと黒い液体を凍った床に垂らし続けていた。

「それは、まさかケイオスタイド……？ 一体どこから、どうして」

アナスタシアはあり得ない既視感をなぞるように呟く。

人理焼却を食い止めてから既に数ヶ月が経過した今になって、なぜこれが出てくるのか。なぜヴィイの中から溢れてくるのか。

なぜ、なぜ。溢れ出る疑問を検討する間もなく、ケイオスタイドは更にあふれ出し、人形の顔に集まっていく。

瞬く間に何も無い顔に黒い泥で形作られた大きな瞳だけが浮かび上がると、それは大きく見開かれてアナスタシアと視線を合わせる。

その瞬間、アナスタシアは身じろぎ一つ取れなくなったことに気づいた。

全身が凍ったように動かなくなり、瞬きすら許されない。魔力で何かをしようとしても、それすら形になる前に塞き止められ、凍りついて消えてしまう。

（ヴィイとの契約が……。いえ、これはまさかヴィイ自身が汚染されている？ このままでは、わたくしも）

どうにかしなければと焦る内心とは裏腹に、体は冷や汗一つ流さない。全身をヴィイか、それを乗っ取ったケイオスタイドに管理されてしまっていた。

立ち上がったままの無防備な姿勢の彼女に、ゆっくりとヴィイが近づいてくる。見開かれた瞳はそのまま動くことなくアナスタシアを見つめ続け、すぐ目の前まで来るとぴたりと止まった。

ガラス玉のように透き通った青い瞳に映るのは、同じ色をした瞳の自分。その自分が徐々に息を荒げていくのを目の当たりにして、アナスタシアは自分に異変が起きていることに気がついた。

胸が苦しい。耳元でどくどくと五月蠅く音が鳴り、ガラス玉のようなヴィイの瞳がチカチカと瞬いている。

自分の意思では動かせないまま勝手に息が荒く、熱くなっていく。

（これは、魔眼？ 体が熱い……。わたくしを一体どうしよう！）

チカ、チカとヴィイの瞳が瞬くたび、アナスタシアを食い荒らす熱は増していく。

頬は紅潮し、警戒の色を残していた瞳は緩く濁り始める。

やがて何度目かの瞬きがあった後、アナスタシアの背後になにかの気配が現れた。それは彼女にとってはよく知ったもの、ヴィイ本来の姿だった。

アナスタシアの命もなく姿を現したヴィイだが、今やヴィイはケイオスタイドの入れ物でしかなかった。

何をするのか、と茹だりはじめた頭で考えたアナスタシアの体が、突然がくんと動く。

あ、といつの間にか動くようになっていた口から間の抜けた音が漏れた瞬間、体は後ろへと倒れこむ。まるで背中を引きずられたように動くと、なんともいえない奇妙な感触で体が包み込まれた。

「あ、くっ……!?!」

ヴィイという魔力の塊を媒体に実体化したケイオスタイドは、ヴィイの姿を象っていた。

見てくれはどうあれ、その泥がおぞましいものであることに変わりはない。それに沈み込むということがどういふことか、アナスタシアはその身をもって思い知ることになる。

「ふあ、あ、ああああっ!?!♡」

思わず漏れた声は色を孕んだ艶かしい音だった。

火照りきった体に染み込むように、ひとりで蠢いて浸食を始めるケイオスタイド。魔力で対抗しようとしても、それはあっけなく破られ体に入り込んできてしまう。

「ヴィイ、やめて、やめなさいっ。うくっ、ああっ!」

泥を溢れさせ続ける人形のヴィイに見守られながら、本体のヴィイに全身を包まれてなす術なく泥に漬け込まれるアナスタシア。

その美しい白い肌は、既にゆっくりと黒く染め上げられ始めていた。

おぞましいことに、その浸食には苦痛がない。まるで硬く強張った体をほぐされ、溶かされていくようで、意識しなければあっさり受け入れてしまいうまいそうないやらしさがあつた。

「ふう、あ、く……! わたくしの、なかに……!」

じわり、じわりと泥に侵されていく体。まだ辛うじて霊基は汚染されていないものの、このままではじきそうなるだろことは確実だった。

しかしそれを止めるすべはない。

最初の一手を間違えたアナスタシアに、この状況を打開する方法はなかった。

もつとも、逃げ出そうとしたところで『偶然』躓いたり、あるいは『たまたま』鍵が壊れていたりしただろう。ヴィイ本体を乗っ取ったケイオスタイドの『ささやかな悪戯』によって。

「いや、ヴィイ、見ないで、見ないで……っ!」

全身を押さえつける感覚はないものの、泥に侵されて自由がきかず。まばたき一つですら、人形のヴィイに見つめられている限り出来なかつた。

ガラス玉のような人形の瞳を見つめっていると、まるで犯される自分をカメラか何かで撮られているような感覚に陥って、アナスタシアは不覚にも浅ましい興奮が自分の中に芽生えているのを感じる。

あるいは、その感覚を植えつけるためにじっと見つめ続けていたのか。ただケイオスタイドで侵食するだけではない。まるでアナスタシア自身を貶めようとするかのようなその行動に彼女が思い至る前に、ケイオスタイドの動きが変わる。

にゆるん、と下半身を埋める部分が蠢くと、股の間にすりすりとしすり付けられるものがあつた。

ほかの部分とはわずかに違う、程よく固まった泥の張り型。それがほかの泥を潤滑剤にして後ろの穴へと近づいてくる。

動きの違うものが近づいてきていとわかつたときにはもう遅かった。

「んひっ!?! そ、そこはちが、おぐっ——!?!♡」

火照り弛緩した体に抵抗など出来るはずもなく、泥の張り型はいともたやすくアナスタシアの尻穴へと滑り込む。

明らかな異物感が下半身に生まれ、くすぶっていた甘い熱がそれに誘われるようにして加熱していく。

泥に犯され、体を別のものに作り変えられる快感が、尻穴を犯される感覚に繋がってしまう。どちらも本来は感じるはずのない感覚だというのに、まるでそう感じる事が当然のことのように思えてくる。

「んおっ!? や、やめ、そこはお尻、いいっ♡」

穴から張り型が抜かれると、腰が引き抜かれるような快感が走る。

そして開いた空間にはジワリと泥が滲み、押し込まれればそれが無理やり体の奥へと押しやられ、内側が犯される快感を得てしまう。

抜いて、さして、抜いて、さして。繰り返し、繰り返し、初めはゆるやかだった動きが加速していくたびに、アナスタシアの喉が絞り出す声が変わっていく。

悲鳴や静止、助けを求めるものから、艶やかで甘ったるい、明らかに快感を訴えるものへ。

「おっ♡ お尻いいっ♡ 中から変えられてえ♡ ヴィイツ、やめ、んおっ♡」

既に体は三分の一ほどが黒く染まり、下半身は濁った愛液の混じるケイオスタイドで汚れている。

ヴィイとの見つめあいはまだ解かれていないため、アナスタシアの痴態は何もかもがガラスの瞳にしっかりと映りこんでいた。

そして、それを見つめるアナスタシア自身も、自分の痴態を見せ付けられる。視線を逸らせず、快感を外に逃がすことも出来ず、ただゆるやかに蕩けさせられるだけの時間は、アナスタシアの理性を根元から腐らせて泥を受け入れさせるのに十分すぎた。

ひとしきりアナスタシアを喘がせたヴィイは、おもむろに体を震わせ、どぶん、と彼女の体を一気に飲み込んだ。

「……っ!? ……っ♡」

ちょうど、ヴィイの体からアナスタシアの顔だけがひょっこりと出てくるような形。

耳の手前までが露出し、それより後ろはすべてヴィイの中に埋まってしまっている。正確に言えばケイオスタイドの中に、というべきか。

尻穴を埋めていた泥は更に深く、ずるずると奥へ奥へと入り込んでいっ

てしまう。奥へ、つまり尻から繋がる長い長い管の中をケイオスタイドが這い回ることになる。

外側からは泥の海が染み込んで、内側からは泥の本流が這い登ってくる。そうして変えられる自分の姿を、目の前の人形の瞳に映して見せられ続けたアナスタシアは、それがまるで他人事のようにすら思えてしまう。

「あ、あ、あ、♡ これは、こんな、だめ、だめ、けさないで、いや、またすたー、ますたー……!」

瞬く間に体が染まる。心が染まる。頬に額に黒が走り、その全てに快感が混じる。

焼け落ちる町でマスターと出会い、数多の特異点を駆け抜けた思い出。出会いも別れも、喜びも悲しみも、その何もかもが無駄であったように、黒い泥に溶けていく。

止めなければ、と思った傍からその心も蕩けていって。なぜそんなことをしなければいけないのがわからなくなる。

先ほどまでの一連の動きがぬるま湯に思えるような、何もかもを溶かしつくされる快感。

ただ気持ちいいと言うだけではない。仮初の肉体もその根幹たる霊基も、泥に浸され犯されて、その泥と同じものにされていく。

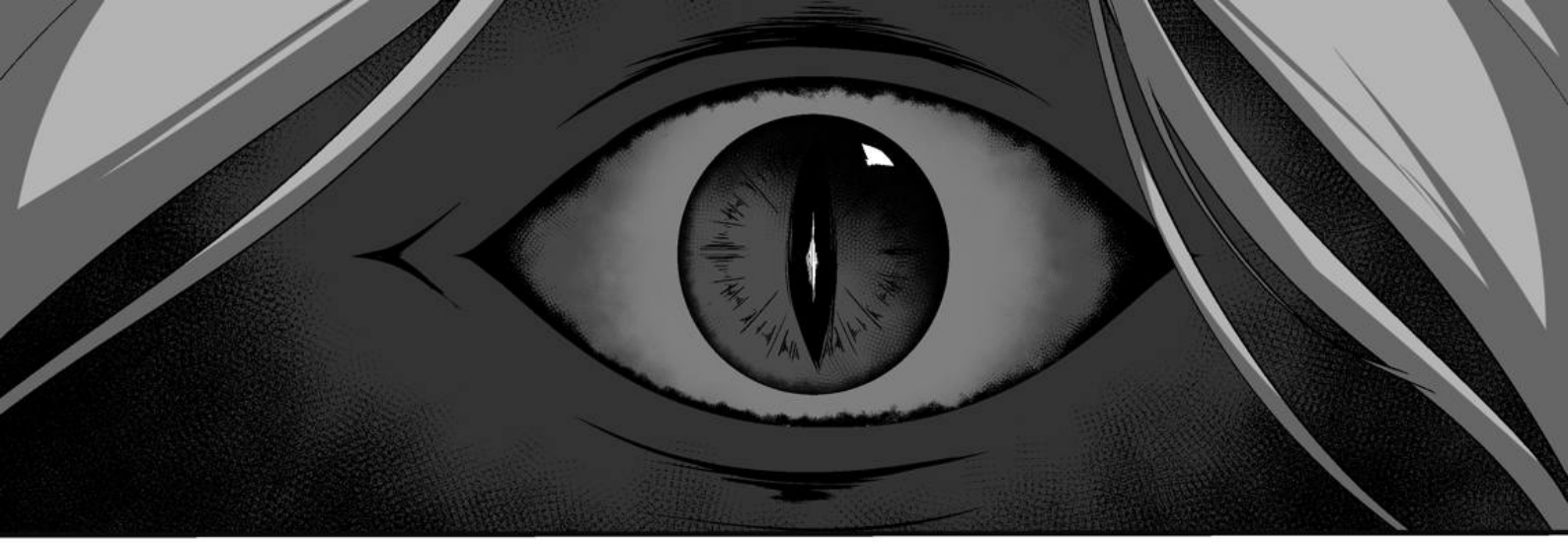
かつて自分の雛形を産んだ母と同化するという回帰の快楽。それがアナスタシアの全身を包み、溶かして、変えていく。

「わたくし、わたくしは……。わたくし、は……。? なんだった、かしら……」

守らなければならぬものを汚される苦しみ。汚されたという思いすら蕩かされる心地よさ。

焦りと安らぎがひっきりなしに生まれては消え、消えてはまた生まれて。「マス。ター……? わたくしは、なにか、わすれ……」

霊基が溶ければ、記憶も溶ける。記憶が溶ければ情動も溶ける。



中と外から犯されきつたアナスタシアは、それでも何かを言おうとして、口を開いたり、閉じたり、して。

なにか、なにか。あつたはずのことを、思い出そうとしていたことを、つなぎとめようとして。

「……おもいだせ、ないの。 きもちいい、のよ」

ただ、決定的に欠けてしまった言葉だけが零れ落ちてくる。

ほんやりとした顔の自分を、自分が覗き込んでいるという、おかしなさまに、口の端が、へらり、と笑った。

「ああ、あなた……。とつても、きもち、よさそうね……」

ヴィイの瞳の中の自分が、へらり、へらりと笑う。

それにつられて、自分も笑う。あるいは、自分が笑って、瞳の中の自分がつられたのだろうか。

もう、なにもわからなかった。

それでもよかった。ただ気持ちよくて、心地よくて、何かをしなければいけないような気もしたけれど。

「でも、きこえるの。うたが、きこえるのよ。ねえ、きこえるでしょう？ わたくし、おうたはとくいなのよ？」

何を見ているのか、何を聞いているのかもわからない中で、アナスタシアが言った。

そうして体を溶かされ、知性も理性も溶かし尽くされ、辛うじて残った美しい顔も黒く染まりあがる。

瞳は完全に虚ろになり、口は半開きになって時折唾液に混じった泥を垂れ流し。白痴のように呆けた顔を見せる彼女は、時折快感に体を震わせながら、じっとヴィイの瞳を見つめ続けている。

ヴィイの瞳に映る、泥に飲まれた蕩けた皇女。そんな彼女が最後に見たのは、唯一露出していた自分の顔が泥に沈む光景だった。



解けて、溶けて、融けて。

母の胎に戻ったように、アナスタシアは膝を抱えて丸くなる。

身に纏っていた重苦しい衣装は、泥に触れた途端に溶けて消えさった。生まれのままの浅黒い肌を、手を滑らせるようにして抱きしめる。

ヴィイを媒体に増殖したケイオスタイドに包まれ、彼女は心から安らいでいた。

部屋に溢れていた泥は全てアナスタシアの元へ集まっている。泥の隠れ家となっていた人形はアナスタシアのすぐ傍に漂っているが、彼女はそれにかける興味を示していなかった。

今の彼女が興味を示すのは、最愛の母のことだけ。自分と契約を結んでいた何かのことなど、もう溶けて消えてしまっている。

恐ろしいことはない。苦しいことも、痛いことも、母に包まれていれば何もない。

包まれ、守られ、不定形の温もりと一つになれていることが何よりも彼女の心を満たしていた。

しかし、それも永遠ではない。元より辛うじて人形に潜んでいただけのケイオスタイドは、その絶対量が少なすぎた。

アナスタシアと繋がったヴィイと言う精霊そのものを栄養として増えたものの、やはりその程度ではかつての母を呼び覚ますことは不可能である。だからこそ、アナスタシアはこの穏やかな眠りから目覚めなければならなかった。

「……マーマ。マーマ、可愛そうなマーマ」

泥を揺らすように、アナスタシアが呟く。

雪のように美しかった白い髪は灰にも似た色に濁り、透き通るような白い肌は浅黒い褐色肌へと産み直されている。

「わたくしがきつと助けるわ。だいじょうぶ、誰もわたくしを疑わないもの。悪戯するのは得意なのよ？」

使命感にも似た思いが、彼女の中に湧き上がる。それは、愛する母を救わなければならないという、愛らしい娘の決意だった。

自分が救った世界にとつて、それがどんな意味を持つのかなど考えもしない。

いや、そもそも考える意味などない。今のアナスタシアはそういうものに産み直されたのだから。

「だから、待っていてマーマ。すぐに、きつとすぐに、マーマと会えるわ」

そうして、アナスタシアの瞳が開く。それと同時に彼女を包む泥は人形のヴィイへと吸い込まれ、後には色が変わったアナスタシアだけが生まれたままの姿で横たわる。

開いた瞳は、右目だけが紅く、十字の切れ込みを持っていた。敬愛する母と同じ、獣の瞳。

それが瞬きするだけで青い瞳へと戻ったのを皮切りに、アナスタシアの姿も一瞬で切り替わる。丁度、同じ構図の違う衣装に差し替えられたように。

黒い肌、灰の髪は白く。何も纏わぬ素肌には以前と同じ重厚なドレス。かつてのアナスタシアと同じ姿に戻ると、ヴィイを無造作に拾い上げてにっこりと笑う。

「マーマを殺した償いに、皆でマーマを助けましょうね。いきましよう、ヴィイ」

ぎよろり、と何もない顔に巨大な瞳が一つ開く。
そこに映った浅黒い本当の自分は、蕩けるような笑みを浮かべていた。



あとがき

浪花道またたひ

黒ギャルビッチになった
鈴鹿御前見たくない…？
ってことで描きました
何気にFGO悪堕ち描くの初めてだな

ドラキエフ

この度はお誘いありがとう
ございます！
思えば悪堕ち系ってあまり手
を出したことないジャンルなんですよ…
楽しく描かせて頂きました！
ムっち♡ムっち♡

肉汁

ラフム化は何度描いても
楽しいです

小川 小

伊吹童子にヴリトラと
好み直球のキャラが
立てつづけにきて大変嬉しい、
もっと早くきてくれてたら
確実にこの2人でも原稿描いてたのに…！

ちまき

公式の便利な
悪堕ちガジェット
ありがとうございます〜す！！

みにまき

こんにちは。
エレナママが酷いことになって
泣き叫ぶ姿が見たいという気持ちで
生きてるみたいなどこあるので
よろしくお願いします

さなみのすけ

合同誌のお誘いいただき
ありがとうございました。
肉壁に包み込まれて悪堕ちという
俺得なシチュですが
楽しめたなら幸いです！

左藤空気

改めて
「塩基契約(アミノギアス)され
自動的に人類の敵になってしまう」
ってくだり、エロ過ぎますね…

ky

最後らへん
ヤケクソになって
チンコ描きまくってゴメンね

る〜く

ケイオスタイド……
ラフム化……
悪堕ちいいよね……

あとがき

ふしもん

365日鬼イベ期待してます



禰長 マスカルポーネ

好きなように描けて
楽しかったです！
ラブム化すぎ……



ピケル

楊貴妃ちゃんを
この合同で描けてよかったです！
誘って頂いてありがとうございました！
早くゲーム中での
楊貴妃ちゃんの活躍が見たい…
(頂いた当時は大海戦配信前でした)



后

エルバサはそんなこと言わないを
違ったベクトルで描けて
楽しかったです



鮫毒大ニ

Requiemコラボで
黒マリーが出てきた時は
ネタ被りかとドキッとしました。



マフヨコ

合同にお誘い頂き
ありがとうございました！
あまり描いた事のないジャンルですが
楽しく描かせて頂きました！



ADU

マッシュにコスプレさせたかった



ぎゅーふ

スランプ？気味ですが
がんばって描きました
気に入ってもらえたら嬉しいです



久住裕治

アニメにもなったので
ますますケイオスタイドクラスタが
増えることを祈っています。



幾枝風児

やりたいことが詰まり過ぎて
説明文しか
入らなかったでござるの巻



あとがき

2020年、たくさんの方があったような無かったような、そんな感じで過ぎて行きました
コロナがあったりコミケが中止になったり、何かと騒がしかった……(身内でも色々ありました
というかコロナはまだ騒がしいですね、見てくださっている皆さんもお体にはお気をつけを

FGOケイオスタイド合同……ということで
アニメに合わせて色々出すつもりだった合同誌です。

……本来は5月に出すつもりでした、コミケ中止になったものは仕方ない……
でも流石にこのままだと来年のコミケまで出せないかも……となり
冬のエアコミケで出そう！という流れになりました

参加して下さった方々、お手伝いして下さった方々、大変ありがとうございました

今年の推しは卑弥呼と伊吹童子です、大変………良いものでした………

明寝マン

奥付

サークル：朝寝坊クライシス
発行者：明寝マン
連絡先:senpai_763@yahoo.co.jp
twitter:AKaNe_763
印刷：同人誌印刷ドットコム様
発行日:2020/12/31

※18歳未満の購入・閲覧を禁じます

無断引用、転載禁止

ドラキエフ

頑張り
マスカルポーネ

小川 小

后

みにまき

マフキヨコ

左藤空気

きゅーぶ

さくく

幾枝 風児

浪花道またたひ

ふしもん

肉汁uc

ピケル

ちまきく

鮫毒丈二

さなみゆすけ

ADU

ky.

久佳裕治

朝寝坊のライズ

明寝マノ



英霊汚染

ケイカスウイド合同社

ドラキエフ

小川 小

みにまき

左藤空気

ふ〜く

浪花道まいたび

肉汁uc

ちせさく

さねおのすけ

ky.

朝寝坊ケイイニス 明寝マノ

頑張り
マスカルポーネ

后

マフキヨコ

きゅーぷ

幾枝 風鬼

みしのおん

ピクル

鮫毒太二

ADU

久佳裕治

敬称略 掲載順

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止